

厳島神社：平家納経と平清盛

平家納経は、大きな力を持った平家一門が 1164 年に神社に贈った 33 の大変華やかな巻物のセットです。日本史の重要な分岐点における厳島神社の高い地位を伝える美術品として極めて貴重なものであり、国宝に指定されています。こちらで展示されている巻物は複製です。

平家一門を率いる平清盛(1118-1181)は、巻物が寄贈された当時、日本で最も力を持つ人物になろうとしていました。彼はすでに朝廷で大きな影響力を振るっており、1167 年に国の最高管理者であり事実上の指導者である太政大臣(英“chancellor of the realm”)の職位へと上り詰めた初の武士出身者となりました。かつて安芸郡(現在の広島県西部)の総督(注：安芸守の意)を務めた清盛は数十年にわたり厳島神社を参拝しており、清盛が力を握ると厳島神社は京都の貴族社会の中で特別な地位を享受するようになりました。

豪華に装飾された経典の巻物を神社や寺院に寄付することは、平安時代(794-1185)の貴族社会で確立された習慣でした。そのような供物は主に信仰心を表すため、極楽往生を祈願する目的で納められました。平家納経には法華経全巻、阿弥陀経、般若心経が含まれ、平家一門の武将たちが自らの信心深さを示すためにすべて手書きで写したものです。経典は金、銀、および中国から輸入された着色料等、当時入手可能な最高級の材料を使って飾られていました。平家納経には清盛による自筆の願文が添えられており、清盛はその中で当時、観世音菩薩としても信じられていた厳島の紙への深い信仰心を明言しています。日本を 1000 年以上にわたり強く信じられた金剛的な宗教観「神仏習合」を終わらせた、1868 年に政府が命じた仏教徒神道の分離(注：政教分離)の後、観音像は大聖院に移されました。